ベトナム・国民経済大と国際交流協定

メコン地域の研究深化

▼ 国民経済大学のキャンパス

専修大学はベトナムの国民経済大学（チャン・ト・ダット学長、ハノイ市）と12月9日、国際交流協定を結んだ。本学商学研究所と同大学ビジネススクールとは2011年に国際交流組織間協定を結んでおり、大学間協定に発展した。経済発展が著しく、親日的なベトナムとメコン地域を舞台にした企業の研究を深化させるとともに、新たな学生間交流が期待される。

ベトナムの大学間協定は、ベトナム国家大学ハノイ人文社会科学大学に次いで2校目。国際交流協定校は17カ国・地域22大学となった。

国民経済大学は、1956年創立。ベトナムの経済学、経営管理、ビジネス分野においてトップクラスの大学で、同国の市場経済化に即した人材の育成を担っている。

キャンパスはハノイ市中心部にあり、学生約5万人、教員約1200人。商学部、国際教育学部、マーケティング学部、銀行金融学部、法学部、外国語学部など15学部を擁し、ビジネススクールなどの大学院、研究所がある。卒業生は政府機関職員、企業の経営幹部として活躍している。

同大学ビジネススクールとは本学商学研究所のほかにも、本学社会知性開発研究センターのプロジェクト（「アジア諸国の産業発展と中小企業」「メコン諸国における経済統合の中小企業への影響についての研究」）などを通じ、活発な研究交流を行ってきた。

人口増加や都市機能整備により経済発展が注目されるメコン地域。その地域を舞台に研究を進めてきた小林守商学部教授（国際経営）は「ベトナムはメコン地域の中核国。ハノイ、ダナン、ホーチミンなどの都市は中国、ラオス、カンボジアとの国境を越えて人材、物資、資金が行き交う経済回廊の起終地となっている」と同大学と研究・教育交流を深める重要性を強調し、「15年12月末にAEC（アセアン経済共同体）が発足し巨大市場が誕生した。このタイミングでの今回の交流協定締結は喜ばしい」と話す。

▶ 2015年9月、神田キャンパスでのシンポジウムには国民経済大副学長（中央）が参加

さらなる発展誓う

国際交流協定書の更新調印

▲ 記念式典で更新調印を交わした矢野学長（左）とフュース教授

米ネブラスカ大学リンカーン校（UNL）との国際交流協定締結30周年を記念した式典と講演会が12月7、8の両日、生田キャンパスで開催された。同大経済学科長のスコット・M・フュース教授が来学、矢野建一学長と今後のさらなる協力を誓った。

UNLは本学2番目の協定校で1985年10月に協定を結んだ。これまでに本学から学生延べ662人を派遣、UNLから延べ313人を受け入れた。ほかに教員間の共同研究や海外客員教授、国際交流事務課へのインターンシップの受け入れなど、活発な交流が続いている。

7日の記念式典では、学生間交流協定書の更新調印を行った。矢野学長が「ネブラスカ大は専大の古い友達。今後も良きパートナーとしてよろしくお願いしたい」と呼び掛け、フュース教授が「専大の創立者も異文化理解の大切さを理解していた。相互交流を積み重ねてきたが、今後ともきずなを強くしていきたい」と応えた。2人は協定書に調印し、固い握手を交わした。

◇

フュース教授は翌8日、生田キャンパスで「日米間のビジネス関係」をテーマに講演。学生約60人が聴講した。

同教授は経済、政治などを切り口に、米国、日本、中国、韓国の各国が相手方に対してどのような意識や信頼感を持っているかを綿密な統計に基づいて語った。さらに日本とアメリカとの関係がTPP（環太平洋パートナーシップ）協定により、どのように変化していくかを探った。

講演を聴いた佐野雅也さん（商4）は「分かりやすい英語でこちらに問いかけてくるような講演が素晴らしかった。TPPなどによる経済のグローバル化で『世界はつながっている』ということを実感した」と話した。

終了後、フュース教授は開講中のBCLプログラム受講生や専大生らとの交歓会に参加した。

▶ 広大なUNLキャンパス

ネブラスカ大リンカーン校と交流30周年

ネブラスカ大学リンカーン校は米国中西部ネブラスカ州の州立大学。リンカーン市は学園都市としての性格が強い。大学創立は本学より11年早い1869年。学生数は約2万4千人。広大なキャンパスには8万5千人収容のアメリカンフットボール専用スタジアムや劇場、歴史民族博物館がある。

◇

長期留学生としてUNLで学んだり、国際研修館（当時）のレジデント・アシスタント（RA）として留学生らと交流したりした卒業生に、UNL交流30周年に当たりコメントをいただいた。

佐々木貴広さん（平10文）1996年度長期交換留学生＝ネブラスカ州リンカーン市在住

1年間の長期交換留学を経て専大で教職課程を取った後、もう一度UNLに戻り、そのまま現地で就職しました。一時帰国した時にいつも聞かれるのが「なんでネブラスカなの？」。答えは決まっています。「ネブラスカの人々と広い空と気候が自分に合っていた」から。しかしながら、両校の協定がなければ、このような人生の選択はあり得ませんでした。この30年間の両校の歴史に、どれだけ多くの方々の尽力があったか想像すると、感謝の気持ちがあふれてきます。また、自分も関わることができたことを誇りに思います。

石倉友美さん（平16文）2002～04年RA＝UNL留学生と結婚し同市在住

専大の国際交流は本当に素晴らしいと思います。夫は当時UNLからの短期留学生でした。夫によると、国際色豊かで楽しい思い出がたくさんできたそうです。そして「9号館の学食がおいしい！」と話しています。UNLのあるネブラスカは、米国の中でもかなり治安が良い地域です。冬は寒いのですが、人々は心温かく、とてもフレンドリーです。学生の皆さんも、ぜひ国際交流を通じて、生涯にわたる友情を育み、素敵な思い出を作ってください。

▲ RA時代の石倉さん（左）

小倉なつみさん（平17経営）04、05年RA＝UNL留学生と結婚し同州オマハ市在住

専大での国際交流で人生の視野がとても広がりました。夫は「My time at Senshu is amongst the top of my favorite life experiences」と言っています。専大は海外の大学との協定が充実しているので国際的な視野を身につけるには恵まれた環境です。ネブラスカ州は米Fortune500の本社が4つあり、米国のビジネスを体験する機会がたくさんあります。大都市に比べあまり知られていませんが、この機会にいろいろ知っていただけたら幸いです。

◀1987年

◀2015年

1987年の日本理解プログラム（写真左上）。UNLからは15人が来日。2015年11月、UNLで30周年記念式典が開かれた。前列の5人は87年の留学生（同左下）。

大学スタジアムでの応援に感激

▲ 赤に染まったスタジアムで演技を披露した専大チアー＝2001年9月

2001年9月、ネブラスカ大学リンカーン校に遠征した全学応援団チアリーダー部（18人参加）。キャプテンを務めた大川絢子さん（現姓・金岡・平14経済）と、大石理絵さん（平18経済）に当時の思い出を語ってもらった。大石さんは現在、米NFL「アトランタ・ファルコンズ」でプロのチアリーダーとして活躍中だ。

大川さんは「UNLのスタジアムで、トロイステイト大学（アラバマ州）とのアメフット試合の応援に参加したことが一番の思い出。試合前に私たちが紹介され巨大スクリーンに映し出されました」。また「未知の技を習得し、帰国後、大会での演技に入れることができました。その後のチーム作りやレベルアップにつながりました」と語る。

当時1年次生だった大石さんもスケールの大きさに圧倒された。「観客の熱気、試合になると大学全体がチームカラーの赤に染まる光景……すべてが衝撃でした。さらに私たちを笑顔で歓迎してくれた現地の皆さんのホスピタリティーにも感動しました。卒業して本場NFLのフィールドに立ちたいと決意したのは、ネブラスカでの強烈な体験があったから」と振り返った。

※NFL＝米国で最上位のプロアメリカンフットボールリーグ

01年に遠征　全学応援団チアリーダー部